ITP 報告書

博士後期課程 1 年　藁科智恵

派遣先機関名・受入教授名（派遣期間）

ドイツ・マールブルク大学　宗教学部　エディット・フランケ教授

（2008 年 8 月 25 日～2009 年 1 月 25 日）

オランダ･ライデン大学　宗教学部　アップ・デ・ヨング教授

（2009 年 1 月 25 日～2 月 24 日）

研究テーマ：　20 世紀前半ドイツにおけるアジア的モメント

1917 年ドイツにおいて、プロテスタント神学者、宗教学者であるルドルフ･オットー（Otto, Rudolf. 1869-1937）によって『聖なるもの』（*Das Heilige: über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*）が、出版される。現在では、宗教学の古典として扱われているこの著作は、当時ベストセラーとなり版を重ねられていくこととなる。この著作は、「聖なるもの」に直面したときの人間の知覚をさまざまな例を挙げながら記述している。この著作が生まれる背景として、同時代に活動していた社会学者ゲオルク･ジンメルや神学者パウル・ティリッヒ等によって分析されている「宗教的欲求が満たされない」状況があった。それは、それまで自明とされていた「キリスト教」の存在が揺らぎ始めていた状況であった。アジア・アフリカの宗教・文化が視野に入ってくることにより、ヨーロッパの精神状況は、それにどのように向き合っていったのか。本研究者の関心は、この 20 世紀前半ドイツにおけるアジア的モメントを当時の歴史的コンテクストにおいて捉えることにある。

それまで自明であった「キリスト教信仰」というものが社会に占める位置が大きく転換していく状況の下、ルドルフ･オットーは、「宗教的人類同盟（religiöser Menschheitsbund）」を設立することにより、キリスト教以外の宗教とも「宗教」という基盤で同盟を結ぶことを呼びかけている。また、世界中の宗教学者が集まり、数日間生活を共にしながら、それぞれの参加者が講義を行い、それに関する議論を行うというスタイルをとるエラノス会議を、心理学者 C.G.ユングとともに主催している。そこには多くのイスラム学者、仏教学者等が集まり、以後、現在に至るまで継続的に開催されている同会議を通じて、宗教学におけるヨーロッパと非ヨーロッパの知的交流がなされた。

さらに、このエラノス会議が開かれたスイスのアスコーナという地には、1900 年頃から、非ヨーロッパ的志向性を持つコミュニティが出現していた。そこには、学者、アナーキスト、芸術家等、が集まっていた。ここでは、「非ヨーロッパ」に対する強い関心が見られる。

本研究者は、このアスコーナという場に 20 世紀前半に見られた現象を、当時のヨーロッパにおけるアジア的モメントを捉える上での素材として扱おうと考える。

具体的成果

ドイツ・マールブルク大学においては、宗教学部エディット・フランケ教授の指導の下、オットー・アルヒーフや大学図書館においての資料収集を行うとともに、より円滑に研究を進められるように大学の語学コースにも参加した。マールブルク大学は、オットーが実際に教授として在籍していた大学であり、定期的にオットー・シンポジウムが開催されている。2008 年 5 月にはこのオットー・シンポジウムに参加し、世界各国の宗教学者、宗教者が集まり「宗教間対話」について議論するという場を観察することができた。オットーが現代においてどのように受容されているのかが垣間見える貴重な体験となった。

また 10 月にドイツ・ボーフム大学において行われた「アジア・ヨーロッパの間の宗教史におけるダイナミクス（Dynamics in the History of Religions between Asia and Europe）」と題された国際シンポジウムにも参加した。ここでは、以前フランケ教授から紹介されており、メールのみでやりとりをしていたライプチヒ大学博士課程在籍中のチェ・ジョンファ氏にも偶然会うことができ、お互いの研究関心について話す時間を持つことができた。チェ氏は、オットーの宗教的人類同盟を「宗教学」の成立という時代状況との関連から扱おうとしており、お互いの研究関心が非常に隣接しているということが確認できた。このシンポジウムを主催しているボーフム・ルール大学のフォルクハルト・クレッヒ教授は、「宗教学」の歴史に関心を持ち研究を行っているため、シンポジウムの内容も当研究者の関心に関わるものが多く、有意義な時間を過ごすことができた。また、チェ氏を含め、この場に集まった若手研究者とも知り合うことができ、今後研究を進めていく上でのネットワーク作りという面でも非常に有意義なものであった。

オランダ・ライデン大学においては、1 ヶ月という短い期間ではあったが、アップ・デ・ヨング教授の指導の下、主にアスコーナ、エラノス会議に関する情報を得ることができた。アップ・デ・ヨング教授と共に、ヴィレム・ホフステー助教授とも会う機会を持つことができ、具体的アドバイスを頂くことができた。ホフステー教授はヨーロッパの新宗教運動について専門としており、当研究者の研究テーマについても関心を示してくれ、20 世紀ヨーロッパの密教を専門とするアムステルダム大学のマルコ・パシ教授を紹介していただいた。また、重要な文献について知ることができたのと同時に、現在行われているエラノス会議がヨーロッパにおいて実際にどのように受け入れられているかを肌で感じることができた。

今後の課題

今後の課題としては、2009 年 8 月にライデンで行われるワークショップに向けての準備等、今回の滞在において収集した資料、文献、情報の整理、またこの成果を論文にまとめることが挙げられる。